

連れて来家である桜大臣屋敷から戻ってきたところだ。本来ならここにいるはずの二の宮は、祭の宴のためだからと尚侍の御殿に招かれていて、おつきの侍女たちもそれに従っている。うす暗い御殿はどこも静まり返っている。

那珂姫はもう一度繰り返した。

「だってしかたないわ。わが桜大臣家は本当に手づまりよ」

そうとしか言いようがない。父である桜大臣は病気に倒れて役目を果たすことができなくなった。すでに辞表を書いている。おまけに姉の桜女御は、しばらく行方をくらましていたと思っただらんと、出家してしまっていた。

父も姉も俗世からは引退したということだ。人は権力のある者に集まり、その人の多さが権力者をささえる。世俗の地位を失った桜大臣家は、権力争いから脱落したのだ。

もっとも、本音を言えば那珂姫は権力などどうでもいい。父と姉と一緒に、領国へ引きこもってしまいたいくらいだ。その暮らしもきつと悪くないだろう。領国に大臣家の人間が勲ほかの家人と住み着いてにらみをきかせるようになれば、まだ親子の暮らしくらいは何とかなるはずだ。

だが、それはできない。なぜなら二の宮がいるから。桜大臣家が安泰でさえあれば、皇位につける身の上の皇子だ。二の宮を連れて都落ちをするなど、考えてはいけないのだ。「二の宮を守りたいの。どうすればいいのかしら」

すぐに答えが見つかるはずもないと思いつながら、つい

那珂姫はつぶやいてしまう。と、もえぎがこう言った。

「那珂姫。手づまりとおっしゃるなら、明雅様のお言葉を真剣に考えてみるべきです」

那珂姫は返事に困り、もえぎの顔を見つめる。もえぎはなおも言葉を続ける。

「それが一番でしょう？ 自分の家が危うい時、姫君方は頼もしい婿君を見つけて力になってくれとすがるものです。桜大臣家に領地から食料その他の物品が届いていないのは、さしださなくてもとがめられないと足元を見られているからです。勲のほかにも屈強な男たちを雇って領国に遣わせばすぐに解決すること。そういった男たちを抱える財力や従わせる力量のある殿方がいればいいのです」

「それはそうだわ、でも……」

たしかに、桜大臣家の財政はじりじりと細っているから先立つものがない。御殿の奥でしとやかにあれと育てられた女たちに男の統率などできるはずがない。

もえぎは正しい。そんな桜大臣家の窮状があるからこそ明雅は結婚を申し込んでくれたのだともわかつている。

桜大臣の那珂姫が鶴大臣家の明雅を婿に迎えるとなれば、色々騒がれはするだろう。桜女御が大嫌いな皇后は自分の弟と桜女御の妹の結婚にどう反応するか、鶴大臣が桜大臣の姫と息子の結婚をどう考えるか。

しかし、もえぎはなおも言う。